



2014年 第29回総会 涵徳亭



2015年 第30回総会 涵徳亭



2015年 第30回総会 涵徳亭



2016年 親睦会 小諸



2016年 第31回総会 涵徳亭



2017年 第32回総会 涵徳亭



寄稿文 思い出



## OB として D.W.V. 冬山合宿に参加した時の思い出 打矢之威(ゆきとし)

私は 1954 年 (昭和 29 年) 独協高校 1 年生の時、同級生の森本(故人)加藤(故人)、丸山、赤瀬の 4 人と独協高校ワンダーフォーゲル部創設に関わりました。その 1 年後(1955 年)、井上、植村(故人)、滝川、若井、牧田の諸氏が入部し、さらに 1956 年に南(故人)、千野(故人)が加わり D.W.V. の基礎ができました。当時英語の講師として早稲田大学の渡辺英太郎先生(W 大 WV 部監督)、日本史の皆川完一先生(日本山岳会会員)等、そうそうたる山の専門家が独協で教鞭をとられており、また大田 資、奥貫 晴弘、高梨 三郎等の諸先生も WV 活動に関心を待たれていたのが創部初期から指導者に恵まれていたと思います。さらには理科授業の助手であつた東京理科大山岳部在席の金子雄一郎氏も幾多の山行に同行されたと思います。



私は浪人後早稲田大学商学部に入部し我慢していた山登りを再開、早速早稲田大学山の会に入部して本格的に山登りを楽しんでいました。確か大学 3 年の冬、最も山登りが充実し経験も技量も積んだころ、奥貫先生からお誘いを受け D.W.V. の冬合宿にコーチとして参加することになりました。

目的の冬山は豪雪地帯として有名な戸隠連峰の奥にそびえる高妻山、前年の冬合宿でもチャレンジしたが悪天候と深雪で失敗したので、その年は何としても登頂を果たすと皆りベンジに燃えていたと思います。期間は 12 月 22 日から 1 週間ぐらいの予定。参加者は総勢 10 名ぐらい、奥貫先生以外私は会うまで顔も知らない若者(高校生)達でした。確か CL は高島(?), SL は斎藤君(?) 何しろ 50 年以上前の出来事なのですべてに臆気で参加者の名前や日時やコース等も間違いや錯誤があると思いますが、今でも鮮明に脳裏に残っている出来事は遭難寸前まで追い込まれた一連の状況です。



戸隠連峰は屏風のようにそびえる鋭鋒が前面に立ちほだかり、その間隙を縫って谷川沿いに高妻山の登山路に近づくコース、途中 30-50M ぐらいの滝場があり積雪と氷着いた岩場が交互に連続して冬場は難コースでした。滝場の上に避難小屋があり、そこに大量の登山具、食料などデポして頂上アタックに備える段取りになっていました。その年は未曾有の大雪で下山後知ったことですが上信越は 1 週間ぐらい連続して猛吹雪が荒れて、道路、鉄道すべてのインフラがマヒしていたとのこと。我々も全く動けず、毎日避難小屋でゴー ゴーという荒れた天候に堪え、ひたすら天気回復を祈るのみ。12 月 22 日に入山後全く動けず、年末まで沈滞を余儀なくされた。今年もダメかとあきらめムードが出始めたが、多分晦日の 30 日。その日は朝から快晴になり、高妻の大斜面は真っ白な新雪に覆われ正に天祐の瞬間と信じられた。このチャンス逃してなるものかと全員張り切って出発。ところが体がすっぽり埋まるほどのフカフカの新雪は全くはかどらない。そこで先頭隊員を空身にして 5 メートル、10 メートルとラッセルさせる。ばてると次々と先頭を交代させ、スタカトラッセル。高度差 2-300 メートルの急斜面を雪のトン

ネルを作るがごとく牛歩戦術で高度を稼いだ。予定より大幅に遅れ頂上に着いたのは午後 1 時頃、全員で万歳して冬季初登頂の喜びに浸る間もなく、私は帰りの危険を考えると気持ちが重かった。頂上直下の大斜面は新雪に覆われ、白一色のつぺら坊の雪崩の巣みたいな場所に見えた。標高 2,353M のおむすび形の優美な山容だが積雪した冬季になると真に危険な山に豹変する。予定より大幅に遅れているのですぐにでも全員下山させたいが、新雪の大斜面は大勢で一気に下ると雪崩に巻き込まれる。そこで奥貫先生と相談して一年生から順番に一人一人安全な灌木地帯まで間をおいて下らせたので時間がかかる。先生にお先に降りてくださいとお願いしたが”いや私は最後で良い、君が先に降りろ”と全員安全を確かめてから自分は最後に行動する。まさに沈没しかかった駆逐艦の艦長のような責任感のある先生

であった。最大の難所は切り抜けたが、まだまだ滝場岩場、急斜面の連続で全員くたくた汗まみれ雪まみれ。日は暮れてくる。早朝から10時間以上行動している。

やっと谷間の溪流地帯にたどり着いたが、高校生たちはふらふら夢遊病者のように足元が定まらない。そのうち何人かは凍りついた溪流に倒れ込んでしまう。このままでは凍死の危険がある。そこで叱咤激励しながら全員上半身を裸にさせ、乾布摩擦と乾いた下着に取り替えさせ、大型の凍てついた重たいキスリングはその場に放置させ、空身になって隊列を組ませ大声で校歌などを歌いながらひたすら前進した。真っ暗な中たぶん夜8時か9時ごろ、前方遙か遠くにポツンと裸電球の明かりがぼーっと見えたとき、正直言ってこれで助かったとほっとした。着くとそこは戸隠奥社の小さな社坊であった。ドアをドンドン叩くと神官が顔を出しびっくりした様子で”あんた達一体どこから来たんだ!”と叫んだ。一部始終を説明し、このままでは子供たちが凍死しかねない、何とか今晚だけで泊めて欲しいと懇願した。そして親切な神社に命を助けてもらった次第です。あの時の光景と切迫した気持ちは生涯忘れられない。奥貫先生も同じお気持ちであったでしょう。

昭和31年度卒 打矢 之威

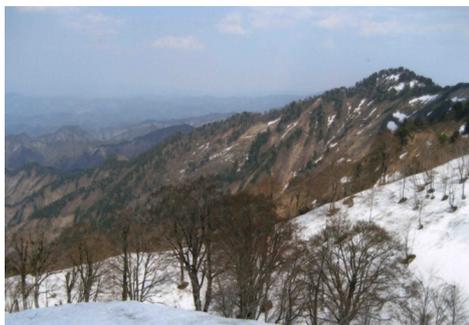
## 出会い

## 飯嶋義信

ワンダーフォーゲル部との出会いは半世紀以上も前のこと、高校一年生の時であった。くしくもワンダーフォーゲル部の記念すべき年1955年のことである。今にして残念に思うのはその新生の意気盛んなワンダーフォーゲル部に入部しなかったことだ。私が選んだのは文芸部だった。だが、たまたま文芸部とワンダーフォーゲル部の部室が同じであったことからワンダーフォーゲル部を知ることになったのである。文化系と体育系の部が同居していたというのは奇妙なことだったかもしれない。当時わが母校は明治以来の洋風木造校舎の痛みが激しく建て替えの聲が高まっていたころ、新校長に文部大臣を辞めて間もない天野貞祐先生を迎え、新校舎建築が軌道に乗ったところであった。そんな疾風怒濤のなかで新設のワンダーフォーゲル部と同人誌「吠える」発行で気をはく文芸部に対し不要となった教室が部室として割り当てられたのであろう。旧生物実験室であった部屋はかなり広く、もともと少人数の文芸部は片隅に置かれた払い下げの教員用の机と本立てのまわりに集まって文学談義の真似事をする程度であったから、互いに邪魔にはならなかったと思う。その時のワンダーフォーゲル部には打矢さんをはじめとして加藤さん森本さんなどの創部メンバー、二期目を支える若井さん井上さん滝川さん、同期の千野さん南さんなどそうそうたる面々がいて名前を覚えてもらうだけでもやっとならぬのに、「吠える」を買ってもらったり原稿依頼したりで生意気な口を聞いたことを覚えている。勿論入部を誘われたが、中二の時に敗血症こじらせて長い間休んだことがあって山に行くなど考えられなかった。話が前後するが、実はこの長期欠席の前は中学陸上競技部の短距離選手としてグランドを走り回っていた。その陸上部の先輩の一人が打矢さんだった。打矢さんは投擲専門で砲丸だけならともかく、狭い校庭で円盤や槍まで投げているのには驚かされた。ともかく吉岡隆徳に憧れていた陸上少年が詩や小説をかじったり同人誌を作ったりすることに夢中になっていたのである。さらに「吠える」に執筆してもらっていた高梨先生のところへ出入りするようになり、秦野の農村調査に誘われ一日ヤビツ峠から大山に登ったことがあった。山の面白さを知ったのはこの時だったと思う。その後山には一人で行くようになった。仲間と一緒にだと足手まといになると勝手に思ったからである。山行の知識や情報はワンダーフォーゲル部の部員に聞いたり山道具まで借りたりした。エルゾグの「処女峰アンナプルナ」を読んで感動し、衝動的に八ヶ岳縦走に挑戦し疲れ果てたこともあった。大学に入ってから時々山には出かけたがのめり込む事はなかった。それが、母校の教員になり高梨先生に声をかけられて顧問になったのがワンダーフォーゲル部との再会であった。以来二十数年、引率山行を重ねることになったがその間、何とか顧問を続けられたのは、慎重なうえにも慎重にという高梨先生の方針の下に、OB諸兄の協力、現役部員の頑張りがあったからのことだと思い感謝するばかりである。最後に顧問として常に念頭においていたフランスの登山家ジャン・フランコのことば「山は根気強い勤勉さと、沈着と、頑張りの学校だ」を紹介して終りとしたい。

元D.W.V.顧問 飯嶋義信

私はワンゲル部 OB ではないが OB 会との結び付きは佐藤八郎、常盤雪夫、杉島祐一さんらとクラスメートであったことから飯能河原のバーベキューに誘われたことが発端だった。以来、小諸の親睦会や休日の山行に居心地の良さもあり参加するようになり、OB 会の仲間に加えていただいている。



稜線に出る

と旧遊した山々の光景が思い出される。特に、5月や秋の連休に野岩鉄道や会津鉄道を利用して足繁く通った南会津の山々は懐かしい。会津駒ヶ岳、荒海山、七ヶ岳、小野岳、博士山、二岐山、御神楽岳である。

御神楽岳(1386m)は磐越西線津川駅の南20kmほどのところにある越後山脈北部の一峰である。それほど高くないし知名度の低い山だが、急峻な岩壁を周囲にめぐらせ荒々しい山容を誇っている。OB会では5月の連休に2年連続で挑戦したことがある。室谷登山コースを登るが稜線に取り付く辺りは膝まで達する程の積雪。対峙する尾根筋は中腹から稜線にかけては至るところ岩が露出して急な斜面をつくっておりU字型に浅くへこんでいる。アバランチ・シュートと呼ばれる雪崩のすべり台である。谷底には黒く汚れた雪渓が残る恐ろしい程の眺めだった。片側が切れ落ちる稜線を雪庇に注意しながら灌木やネマガリダケの生えている側を登るが山頂は未だ先、我々の実力はここまでと撤退を決断する。今も



御神楽岳とU字型のアバランチ・シュート

我々にとっては未踏の山である。「みかぐら」という響きの良い名は何に由来したのだろうか。調べてみると、越後野誌に「古へ覚道ト云フ人、峰ニ登テ神楽ヲ奏セシ、故ニ山名トス」と記されているとあった。神秘的な一面を持ったこの山に魅かれるのは、私が追っかけをしているギフチョウの棲息地として知られていることも理由の一つになっている。

この山行で忘れてならないのは登山前日の夜、みかぐら温泉の送迎バスによる祭り見物である。普段「狐の嫁入り」と云えば、「天気雨」を思い出す人が多いだろう。だが、津川では毎年5月3日の夜に開催される奇祭「狐の嫁入り行列」がある。町に口伝されてきた狐火伝説を元にしていて、毎年5万人もの人が訪れる祭りである。

白無垢姿の花嫁が108人のお供を引き連れて行列を作り、松明や提灯で幻想的な雰囲気にも包まれた町内をゆっくりと進む。花嫁の鼻筋を白く化粧し頬に描かれた狐独特の三本のひげと尖った口先のメイクは狐顔そのもので神秘的な様相を醸し出している。お巡りさん、駅員さん、高速道路出口のオジサン、参加する町民までも狐のメイク、そして見物客も。やがて行列は常浪川に架かる城山橋上で花婿と花嫁の対面が最高潮に。暗闇に包まれた河原から燃えさかる篝火に見送られ、渡し船で常浪川を隔てた麒麟山へ。篝火と狐の鳴き声が山々にこだまする様は幻想的で「狐に化かされたような」感動を与えてくれたことも、OB会山行の懐かしい思い出でとなっている。(山行：2007年5月)



幻想的な狐のオブジェ

元 D.W.V.顧問 金 有一

## ワングルの思い出

## 滝川国勝

獨協高校での部活は思い出深く、楽しいものでした。1 学年先輩達の 5 人が創部したワングルに入部した動機は、はっきりした記憶がありませんが、私には二人の兄達が山登りが好きで、家には山の写真用の 6 × 6 判のカメラや、山岳雑誌があり、その影響があった様のように思われます。

先輩達と早稲田大学のワングル部の活動に参加させていただき、美ヶ原高原周辺を散策して当時流行し始めた山の歌や民謡風の歌を、女子大生を囲み楽しそうに合唱している光景に羨ましく思いました。歌集をコピーして練習しましたがどこか淋しく皆な大きな声で歌っていました。

ワングルとしての知識も実績も無く手探りであって、トレーニングにしても目白駅往復のマラソンを気が向けばするだけでした。

ワングルでの一番の思い出は上高地横尾キャンプ場での一週間程のキャンプでした。

真夏の暑い東京を出発し、数時間後に涼しい上高地に着き、美しい梓川周辺や河童橋を渡る時に見た穂高連峰の素晴らしい風景を今だに忘れる事が出来ません。ベースキャンプ場を中心に遠くから見ると優雅で美しい常念岳、大滝山、蝶ヶ岳への登山、そしてキャンプ最大の目標であった槍ヶ岳へアタックでした。その登山は途中から岩場の連続で、急な傾斜で厳しい道程でしたが頂上からの景色の素晴らしさに疲れも忘れるほどでした。キャンプ場での梓川の水での飯盒炊飯やキャンプ打上げでのキャンプファイヤーの炎等思い出がたくさんあります。

下山途中で岩につまずき、左腰部を痛めました。1 週間後に坐骨神経痛を発症し、その治療のためワングルの部活が出来なくなりました。その後ワングル部員も増え、体制も整ってきたことを知りながら復活出来ませんでした。

今は亡き、創部当時の二人の先輩達、共に楽しみ、苦しんできた同級生、後輩たちのご冥福をお祈りして、ワングルでの思い出とします。

昭和 32 年卒 滝川国勝

## ワングル部と私

## 菅野則一

今から 5 6 年前、獨協中学 2 年生の夏休み、知り合いの大学生に連れられて北アルプスの銀座通りを歩き大自然の雄大さに感動しました。翌年の夏には八ヶ岳を登り少年なりに山の魅力を知りました。

獨協高校に進みワンダーフォーゲル部に入部、当時は同期が 10 名ほどいて先輩も多く今思うとワングル部の最盛期だったのでしょう。その頃日本の登山人口は 500 万人と聞いた覚えがあります。

その夏初めての合宿は私にとって大変過酷なものでした。ひ弱でガリガリの少年は 50 ㎏近いキスリングを背負い上野駅のホームに辿りつくまでに、へばってしまいました(学校から上野駅までキスリングは山田先輩がトラックで運んでくれたのですが)。自分の体重と同じキスリングは 1 度降ろしたら最後、自力では 2 度と立ち上がれませんでした。こんなことで朝日連峰の縦走なんて…不安で夜行列車では殆ど眠れませんでした。

翌朝歩き始めると不安は現実となりました。特に登りはへろへろで高梨先生、飯島先生、藤田リーダー等の叱咤激



励の声も虚ろに聞こえ、意識は朦朧としてきます…もう二度と山なんかに来るものか!合宿が終わったら直ぐに退部しよう!と思いながらひたすら耐えました。ところがそれほど疲労困憊しても、雄大な東北の山懐に抱かれているとなんとも不思議な感覚を覚えたのです。この感覚はその後も山に入る度に感じました。山を降りて数日もすると苦しさを忘れ再び何処かの山へ行きたくなる、こうした繰り返しでした。

飯島先生や常盤先輩などで行った春の金峰山・瑞牆山。八ヶ岳は好天に恵まれすばらしい雪山を楽しむことが出来て益々山にのめり込みました。

獨協大学に入り高校の先輩達が創部した山岳部に入部し、新人歓迎山行には参加したものの根性無しの私には続きませんでした。甘い気持ちでワンゲル部に移り2年ほど在籍しました。ところがワンゲル部では物足りなく山岳部ではハード過ぎる、この中間位がいいな…なんと我が儘な!

高校ワンゲル部のOBとして現役に随行して山へ行くこともよくありました。その頃の獨大ワンゲル部は冬山は禁止でした。これも歯がゆく結局はそのワンゲル部も退部してしまい、社会人となるまでの間、自由に気ままな山歩きをしていました。

たった10年のこんな登山歴でしたが、ワンゲル部のおかげでひ弱だった少年は健康になり(今もガリガリですが)、登山の楽しさ、自然の魅力友達の有難さなどを知り、私の人間形成に大いにプラスとなりました。



お世話になった故・高梨先生、飯島先生その他先輩、同輩後輩にはとても感謝しております。

残念なことは同期だった坂井格君、大成哲君、山中和雄君が60半ばで他界してしまったことです。

昭和41年卒 菅野則一

## 朝日連峰縦走の思い出 —昭和38年夏—

阿部 武

獨協ワンゲルに入ったきっかけは野山を歩き回るのが、ワンダーフォーゲルと思い込んでいたからでした。実態は全く別物でした。丹沢でのボッカ訓練の頃から、何故こんなところに入ってしまったのか後悔ばかりするようになっていました。河原で石を拾ってザックに詰めていざ出発。丹沢は人が多い。行き交う度に「チワー」と声を掛ける。内心声を出したくもないし、声を掛けてもらうのも嫌だった。それでも夏の合宿である朝日連峰縦走に連れて行ってもらいました。「雪渓の水は旨いぞ」「星が綺麗に見えるぞ」ワクワクするような事を言われて、荷物を分けられ自宅に持ち帰りました。当時の装備品は灯油・灯油を使うランタンとコンロ・寝袋の下に敷く炭俵・重い寝袋そして飯盒に鍋でした。更に水を吸収するテント一式等でした。忘れてはいけない渋団扇。この団扇は焼き鳥屋等で使われる丈夫な赤い物です。これ等を見た母は、「これを背負って山に本当に行くの?」と目を白黒させていました。後で聞いた話ですが、母は私が帰るまで毎日毎日心配で眠れなかったそうです。自分の持ち物と合わせて40kgは超えていたと思います。当時は横長で大きなリュックサックをキスリングとっていました。当時北海道を旅する若者をカニ族と呼んでいましたが、まさに私がカニ族になりました。上野駅集合でしたので、それまでずーっと横向きに歩いて行きました。朝日に登る為は何処の駅で降りたかは覚えていませんが、山に取り付くまでの長かった事、暑かった事覚えています。但し足元に川が流れそれ程苦痛ではなかったのですが、坂井がすっかり参ってしまったようで、彼の荷物のお半を我々1生で分担しました。2年生も少し持ってくれたようですが、我々1年とは比べ物にならない程キスリングが小さく見ええました。山に取り付いてからは、あの渋団扇が大活躍。色落ちして顔が赤くなりはしましたが涼しい風を送ってくれました。「上を見るな。足元を見て一步一步歩け。休憩まで水飲むな。」過酷でした。坂井は普段口の軽い男でしたが口もきけない程にへばってしまい、更にブヨに刺されて顔が腫れあがり我

々1年生は大変心配しました。今考えると脱水症状だったのでしょう。ところで何処に雪渓があるのでしょう。遠くに見えてはいるのですが、道筋には有りませんでした。それでも沢の水で粉末ジュースを溶かして飲むと最高に旨いジュースでした。登りながらもう山はこりこり。1年生ばかり辛い思いをしているのに、2年生は楽そう。もう部活を辞めようと思いましたが。しかし、稜線に出てからは当たりの景色が見えるようになり、気分は爽快となりました。山を下りて登山靴を脱ぐと、足は豆だらけで疲労感がありましたが、解放感と満足感が広がってゆき、何故か又山に来たいなと思いました。

昭和41年卒 阿部 武

## Schi Heil(シーハイル)

## 柳澤孝嘉

富樫さんが突っ込み重視の荒削りの滑りで雪煙巻き上げゲレンデを先頭切って滑って行く。その後を常盤さんの友人の園田さんが綺麗な弧を描きながら後に続く。次に私が右方向は良いが左方向は外足に加重がかかり過ぎる歪な滑りで続き、私の後を千野さん、植田さんの順に繋がり、ツークで滑って行く。平成18年3月の神楽三俣スキー場の最上部での光景である。

その後、カッサ湖周囲の田代スキー場へ連絡路を滑るが、千野さんがボーゲンとは逆のVの字をスキーで作り、連絡路をクルクル回りながら下るアクロバティックな滑りを見せる。スキーウエアと同様に派手である。カッサ湖傍のレストハウスで休憩後、田代スキー場の主だったゲレンデを皆でツークで滑り、神楽三俣のゲレンデで一人で練習しているビギナーの中野君のもとに戻り、正午前ロープウェイに乗りその日のスキー合宿を終えた。充実した午前であった。



この合宿はスキー合宿が丸沼高原で行うことが数年前より続いていたため植田さんの提案で旧知の三俣のスキー宿のオーナー、通称ゴリの宿で開くこととなった。前夜、ゴリの部屋にある山や川で拾った石を見せられ、数百万するという怪しげな話の数々を聞かされる異色の合宿であったが、スキー場、宿の雰囲気とも印象に残るスキー合宿でした。私はそれまで学生ならびに社会人時代を通してなかなか継続的にスキーに行く機会がありませんでした。そのためOB会のスキー合宿が開催されてからはそれが楽しみでした。スキー後の食事や呑みながらの学生時代の武勇伝、独軍の仏軍への進行や台湾での紹興酒の飲み方等のくだらいことから事業の転機になった出来事等の人生の滋養になる話までと多方面な話題があり飽きることがありません。

時に一緒にいらっしやった奥方の前で春歌を歌ったり、ちょっとした言動で諍いとなったことも今となっては楽しい思い出です。しかし、その頃、中心となってスキー合宿を主催して頂いた先輩方も一人、二人、三人と鬼籍に入られ、スキー合宿も立ち消え寂しい限りです。

そこで、一年発起して山スキーでもやろうかと山道具店に行ってみました。板、靴、シール等を一式で15万!とのこと。靴も足首が太いため合わず、断念。山スキーよりはるかに安い、西洋ワカンのスノーシューでも買って雪山ハイクにでも出かけようか。

昭和49年卒 柳澤孝嘉

## それは宝もの

## 手島達雄

2年前、OB会の有志で忘年会をやった折に勢いで決まった金時山の山行がきっかけで、40年以上遠ざかっていた「再びの山行き」が始まった。母を見取り自分の自由な時間が持てるようになって、今ま

での自分とこれからの自分について考えるようになった。限られた時間の中にある人生、何でもやらなければ損だ。思い立ったら、やり残さず先ずはやってみようと。そして、高校の頃はやり切れていなかったという思いもあって健康増進も兼ねてまた山に行こうと思った。

必要な装備を整え、日帰りハイキングから計画を立てて出かけるようになった。大学に入ってしばらくは山にも行っていたが、興味は別の所に移っていた。大学を出て小学校教員の仕事に就いてからは遠足で児童を引率して天覧山や伊豆ヶ岳などに連れて行くくらいのものであった。異動で2泊3日の尾瀬縦断の林間学校をやっていた学校に赴任した折には、個人的に保護者や職員を誘って燧ヶ岳に登ったりしたこともあった。その後、実母の介護の関係もあって教員の職を辞して東京の実家にUターンした。1年間スクールに通った後、庭づくりから、樹木のメンテナンス、花壇の植え付けや寄せ植え講習会などもやる小さなガーデニングショップを開業した。

すでにもう山に行く事もなくなっていたし、OB会からの連絡はいただいていたものの、特に親しくしている先輩後輩が参加している訳でもなく、秋の親睦会で小諸まで行くのも面倒でもあった。休みが取れるようになった事もあり、総会や親睦会に参加していた同期の二村君から誘われてOB会にも顔を出すようになった。

D.W.V.での経験は高校生のたかだか2年間程度のことだったのにも関わらず、還暦を過ぎてなお、かつてやっていた山の経験が呼び覚まされ引きつけられたのは何でだろうと思う。高校のワングルは体育会系の大学の山岳部と違い、まだまだ幼いもので規模も違ってはいたが、高校生なりのプライドもあった。しかし、当時それほど山をがむしゃらにやっていたわけでもなく、むしろ先輩や同期にくつついて行っていた。その2年間はノスタルジックに美化されただけのものではなく、貴重な何かがあったように思う。景色が印象に残っている訳ではない。達成感があったものの、それが全てではない。苦しくても一步一步前に進んで行く事、体力や勇気が試される事もあった。楽しかったというよりは辛かった事の方が多かったとも思う。重い荷物を背負ってひたすら歩くことは苦しかったし、またバテるのではないかという恐れもあった。テントの中で寝付かれないでウトウトしながら朝を迎えたこともあった。景色もろくに見ないで苦しい思いをしながらひたすら重い荷物を担いで登ったり、より高みを目指して仲間とともに挑戦したりと集団の中で互いに磨き合った大事な時期だったのではなかったかと思う。



蜘蛛の足や軍手が入ったこともあった山での食事。冷たくなって足の感覚もなく歩いた冬の合宿。食当で朝早くテントから起き出での食事準備。雨で濡れて重くなったテントの重さやラジウスの匂い。石油臭くなって潰れたカレンズ(関口台パン屋のぶどうパン)。つぶれたアルマイトのメンツでブドー酒を飲みながら山の歌を歌った最終日の打ち上げコンパ。新宿駅や上野駅の通路やホームでさかい屋の72cmキスリングを並べての場所取り。グランド脇の坂道でダッシュを何本もやって吐きそうになったこと。練習後、江戸川公園でタバコを吸っていてお巡りさんに捕まったことなどいろいろな事が思い返される。これらの一つひとつが積み重なって、人生の中でとても貴重でそして輝いているものではないかと思う。貴重で美しく輝けるもの、つまりそれがすなわち人生の ” 宝もの ” なんだと思う。

昭和47年卒 手島達雄

## 夏山合宿の思い出

岸 房孝

50年以上前、高校2年の夏山合宿の話です。総勢14、15人だったか、行き先は飯豊です。

上野駅から上越線の新津で磐越西線に乗り換えました。その頃の電車はまだSLで、煙を吐いて走っていました。上野駅で磐越西線の徳沢駅と言って切符を買った時、切符に徳沢駅と印刷されていなくて手書きでくれました。それだけ行く人が少ない駅なんだとびっくりしました。徳沢駅に着くと当然バス